

『阿毘曇心論』「業品」における善・不善・無記について

智 谷 公 和

『阿毘曇心論』(Abhidharma-hrdaya-sāstra, 大正藏經 No. 1550, 以下を略して『心論』)「業品」(karma-nirdeśa)における善・不善・無記が、説かれている偈と長行は、大正藏經二八卷八一二頁下段の三六偈とその長行、そして三七偈とその長行(大正二八・八一・二・下八三・上)である。この論文は『心論』と心論系の論書を対照し、また『心論』と『俱舍論』等を対比させて、善・不善・無記を述べてゆくものである。『心論』の漢訳は、法勝(Dharmaśīr)造、僧提婆(Saṅghadeva)・慧遠共訳による四卷本である。『心論』「業品」三六偈は、「教は当に知るべし三種なり。善と不善と無記となり。意の無教も亦た然なり。餘には無記を説かず。」とある。三六偈の長行を意識してみれば、「身業の表業の善とは、善心作の身動で、行施・持戒等である。身業の表業の不善とは、不善心作の身動で、殺生・不與取・非梵行等である身業の表業の無記とは、無記心作の身動で、威儀・工巧・伎術である。口業の表業の善とは、善心従り生じる口動で、不虛の言・饒益

相應の応時の言等である。口業の表業の不善とは、不善心従り生じる口動で、妄言・兩舌・惡口・綺語等である。口業の表業の無記とは、無記心従り生じる口動である。」と解釈される。

心論系の論書と言われるものに、優波扇多(Upaśānta)訳『阿毘曇心論經』(Abhidharma-hrdaya-sūtra, 大正藏經 No. 1551, 以下を略して『心論經』)那連提耶舍(Narendrayāsa)訳六卷と、法救(Dharmatrāta)造『雜阿毘曇心論』(Samyuktabhidharma-hrdaya-sāstra, 大正藏經 No. 1552, 以下を略して『雜心論』)僧伽跋摩(Saṅghavarman)等訳十四卷がある。これら心論系の論書と『心論』を対照すると、『心論』「業品」の三六偈に対応するのは、『心論經』「業品」では、大正藏經二八卷八四一頁上段の三六偈であり、『雜心論』「業品」では、大正藏經二八卷八八頁下段の百偈である。『心論』「業品」の三六偈と『心論經』「業品」三六偈を対照すれば、身業の表業の善・不善と、口業の表業の善・不善の説明は、同じであるが

無記について、『心論経』は、三六偈の長行に二つに分けて説明している。その長行を意識してみれば、「その二つとは、隠没と不隠没とである。隠没とは、穢汚無記心の起す身動である。不隠没とは、非穢汚無記心の身動であり、威儀・工巧である。」（大正二八・八四〇・上）と解釈される。『心論』『業品』の三六偈と『雑心論』『業品』百偈を対照すれば、百偈は、「作は当に知るべし三種。善・不善・無記なり。意業も亦是の如し。餘は無記を説かず。」とあつて、表業と言われものを、『雑心論』は「作」を用い、『心論』と『心論経』は、「教」を用いている。業についての内容説明は同じである。たとえば、身業の表業にある、善・不善・無記や、口業の表業にある、善・不善・無記や、意業にある、善・不善・無記を説く。また、身業の無表業には、善・不善があり、無記がないことや、口業の無表業には、善・不善があり、無記がないことは、心論系の論書は同様に説いている。

『心論』『業品』の三六偈に、「意の無教も亦た然なり。」とある。「意の無教」と言えば、「意業の無表業」と解釈されやすいが、そうではないようである。意業を説くのに、三六偈の長行では、思（Cetanā）を用いて説いているからである。その長行は、「意業の無教も亦た三種。謂く善・不善・無記なり。善心相応の思は是れ善、不善心相応の思は是れ不善、無記心相応の思は是れ無記なり。」とあることから、身業や

口業の無表業とは異なつて、意業の自性（svabhāva）は、思であることを説こうとして、「意の無教」を用いたのであろう。このことは、三五偈（大正二八・八二二・中）に、業を分けて三業・五業として説かれる箇所でも、思を用いている。次に、無記については、『心論』三六偈に、「餘には無記を説かず。」とある。なぜ身業と口業の無表業に、無記がないのか。そこで、三六偈の長行には、「彼は二種。謂く、善と不善とにして無記なし。所以は何ん。無記心は、羸劣にして、それは強力業の謂く、異心中に転じて、彼の相似相隨することを能はず。」と述べられている。無記は「羸劣」と言い、「弱くて及ばない。」性質が、無記であるから、無表業には善・不善だけがあつて、無記がないと説いた。この説明は、『心論経』『業品』三六偈の長行も『雑心論』『業品』百偈の長行も、同様に「羸劣」を用いて無記が説かれる。

『心論』『業品』の三七偈では、さらに、無記の説明を加えている。三七偈は、「色有の無記は二なり。隠没と不隠没となり。隠没は色に繋にし、餘は二界に在り。」とある。無記は、二種類があつて隠没（有覆無記、nivyā-avyākṛita）と不隠没（無覆無記、anivṛta-avyākṛita）である。これについて、三七偈の長行に、「色有の無記は二なり。隠没と不隠没となり。」とは、身・口業は是れ色性にして、業は色性なるを以ての故に、二種なり。隠没及び不隠没なり。隠没とは謂く、煩惱に

覆はれ、亦た、諸の煩惱より生ずるなり。異なるは是れ不隠没なり。」(大正二八・八二二・下八二三・上)とある。業が、煩惱と結び付いているか、否かを意味するものを、善業・悪業と言うから、倫理的判断は煩惱との、不結合・結合によることになる。しかし業界は、快・不快という経験の現実が判断基準となる。故に、業因そのものと業界とは、判断規準を異にしている。業界に善・悪の判断は、あてはまらない。『俱舍論』に「染業不応作、有説亦壞軌」(大正二九・九二・上)とあり、「染の業は不如理であり、礼義(vīdhi)を壞するもの亦(ani)染の業である。」と説かれている。この『俱舍論』に相当する、ゴーカーレー校訂本の梵文は、*ayogavhitam kīṣṭam vidhibhrāṣṭam ca ke cana* (Skt. Gokhale ed. kr. 94)である。Pradhan本では、二五八頁に存する。染の業については、Yasomitra 梵文『Abhidharmakośavyākhyā』に説明があり、曰く、「染の業(Kīṣṭam Karma)とは、理でもなく、また正理でもなくして、煩惱(Kleśa)と結び付いていることである。」(AKV, p. 424)と述べ、引きつづいて、「その結び付きによって、はたらき出た作意(maṅskāra)がそこに生ずる即ちそこに存在してある。こういう場合、その業が不応作(不如理)と言われる。」(AKV, p. 424)このように煩惱(Kleśa)は、「汚れてあること(Kīṣṭa)」に、過ぎないものであって、それを善・悪、あるいは快・不快として判断す

るのは、別個の立脚点に立つからであらう。即ち倫理的判断と経験的判断とによってであるというのである。煩惱自体は、生具的であり、「汚れてある」という現実を示したに他ならない。かくて、善・不善・無記は、業(Karma)と行(Caṇḍa)と言う、二概念の提起によってあらわされている。『心論』あるいは心論系の論書には、「業と行」の二概念について、詳しい説明がなされていないので、『発智論』(大正二六・九七三・下九七四・上)を見れば、二概念について詳しい説明がある。ここでは略す。かくて、業論の構造は、因果性と倫理性の二重構造となつていることが知られる。因果性とは、因より果が生ずる因果の理法であり、倫理性とは、業を倫理的に善・悪の行為として示すことである。しかし、倫理的な善・悪の行為に限られない要素がなお残る。非善・非悪の行為を無記の業と言う。業は因果性を原理としていて、善果・悪果に属さない、無記の果もあることを示す。よって無記は、業の原理である因果性を裏面から証明している。

〈キーワード〉 倫理的判断、煩惱、不結合、結合

(広島崇徳高校非常勤講師・Ph. D.)